

七転び八起き

Ⅱ 中 大 路 「 ダ ル マ 踊 り 」 保 存 会 Ⅱ

笑いと拍手の渦

「鳥取市公民館まつり芸能発表会」で、最初に演技を披露したのはダルマたちだった。テンポのよい曲に合わせて面白おかしく踊るダルマたちに観客は大受け。



会場は笑いと拍手の渦に

笑いと拍手が市民会館に渦巻いた。ダルマをかぶって踊っていたのは、中大路の「ダルマ踊り保存会」(代表 やまさきしんじ 山崎慎二さん・四十六歳)のメンバーだ。「ダルマ踊りは、基本の振り付けで踊りながらも、わざと反対に回ってみたり、ぶつかってみたりしながら見物客をいかに楽しませるかがポイントです。簡単に踊っているように見えますが、これが結構難しいんですよ」と山崎さん。この「ダルマ踊り」の由来は定かではないが、娯楽がない時代の民衆の楽しみの一つとして、明治四十年ごろから盆や祭りなどで踊られていたそうだ。「盆になると、仏さんの供養にと家々を回ります。明け方近くまで踊ったりしましたわ」と相談役の野田達男さん(七十二歳)は、昔を懐かしむ。



手足のバランスが難しい

保存活動

二十年前、当時青年団員だった山崎さんから中大路の若者が、この地に伝わる「ダルマ踊り」を絶やさまいと集結。以来、地道に活動を続けていたが平成七年、正式に保存会を発足した。演技指導は相談役の野田さん。現在のメンバーは十人で、活動当初からほとんど変わっていない。「私たちも四十代。そろそろ継承者が欲しいですね」と山崎さんがこぼす。保存会ができるまでは、継承者不足で何度か踊りが中断されたこともあったとのこと。今、全国のあち

郷土愛

こちらの村や地域で、継承者の不足などで独自文化の存続が危ぶまれているが、「ダルマ踊り」も同じ問題を抱えていた。

「私たちが、ダルマ踊り続けることができるのは、この村が好きだからでしょうね。地域の活性化のため、そして子どもたちの郷土を愛する心を育むためにも、この踊り続けていかなければならないと考えています。七転び八起きで頑張ります」。山崎さんたちの伝承芸能にかける熱い思いが伝わってきた。保存会の活動にエールを送りたい。



保存会のみなさん